

【実践報告】

いこまいセミナーの実践報告 4

基盤的能力獲得への寄与

堀田 亮^{1)・2)・3)}，川上 ちひろ^{1)・4)}，高口 僚太郎^{1)・5)}，奥村 真衣⁶⁾

1) 岐阜大学教育推進・学生支援機構

2) 岐阜大学保健管理センター

3) 岐阜大学医学部附属病院

4) 岐阜大学医学教育開発研究センター

5) 岐阜大学障害学生支援室

6) 岐阜大学人材開発部

要旨

少人数制のグループプログラムである「いこまいセミナー」の2019年度の実践をまとめた。いこまいセミナーは、岐阜大学の全構成員を対象としており、日常生活、学修、就職活動等に必要な知識やスキルの獲得や、様々な体験を通じた交流を目的に開催している。今年度は前期6回、後期5回の全11回開催し、延べ124名（うち教職員延べ19名）の参加があった。実施者は教員に限らず、職員や学生も担い、各プログラムを開催した。特に今年度は学生への事前調査から、コミュニケーション能力を高めたい学生が多くいることがわかり、プログラム内でコミュニケーションが多く生まれる工夫を随所に施した。参加者アンケートでは、各プログラムの参加満足度が非常に高いことが示された他、岐阜大学が掲げる「基盤的能力」の獲得にも寄与していることが示された。最後に今後の展望として、Web配信の可能性について論じた。

キーワード：グループプログラム，学生支援，協働，正課外教育，基盤的能力

1. はじめに

いこまいセミナーとは、保健管理センターが主体となって開催している、正課外の少人数制グループプログラムである。2015年度に前身の「スキルアップグループセミナー」が始まり、翌2016年度より現在の名称となった。もともとは学生を対象としたプログラム

であったが、2018年度後期からは教職員も参加可能としている。参加者間の交流や、日常・学修・就職活動に役立つスキルの獲得、要支援学生の早期発見、学生支援機関（保健管理センター、障害学生支援室）の広報、教職員の学生支援風土の醸成等を目的として、これまで開催してきた。実施協力者も年々増えており、プログラム当日のファシリテーターだけではなく、企画段階から職員や学生の協力を得て実施している。

著者らはこれまで2015年度¹⁾、2016年度²⁾、2017年度³⁾、2018年度⁴⁾の取り組みの概要と成果をそれぞれ報告してきた。本稿では、「いこまいセミナー2019」の実践内容、成果および今後の展望をまとめる。

2. いこまいセミナー2019の概要

セミナーの概要

セミナーの概要と開催日時、参加人数を表1に示した。2019年度のいこまいセミナーは、前期6回、後期5回、計11回を毎回異なる内容で開催した。なお、後期は6回の開催予定であったが、11月27日のプログラムは主担当者の都合により中止となった。これまでは、教員または学生支援系職員が主担当者となることが多かったが、今年度は学生が主担当者になって企画したプログラムを4回、事務職員が主担当者になって企画したプログラムを1回開催することができた。

表 1-1 2019年度いこまいセミナーの概要（前期）

日程	プログラム名	担当者	参加人数	前期合計
5月15日	ペアヨガ：Relax & Communication	石垣倫子（保健管理センター）	13 (0)	73 (7)
5月22日	相手を惹きつける スライドの作り方	堀口拓治（自然科学技術研究科 修士2年生）	12 (1)	
5月29日	「疑う」スキルを身につけよう	高口僚太郎（障害学生支援室）	14 (0)	
6月5日	ハラルフードを知って食べてみよう	シティ・エズリン・ビンティ・イスマイル（工学部2年生） 高田麻紀（保健管理センター）	11 (0)	
6月12日	「計画の立て方」を計画的に学んでみる	川上ちひろ（医学教育開発研究センター） 奥村真衣（人材開発部職員育成課職員育成係）	3 (0)	
6月19日	岐阜の夏の準備を始めよう：熱中症・虫・ケガ	後藤真紀、中村紗矢香、宮本由紀子（保健管理センター）	20 (6)	

表 1-2 2019年度いこまいセミナーの概要（後期）

日程	プログラム名	担当者	参加人数	後期合計
11月13日	非常時の食事どうしよう？	高田麻紀（保健管理センター）、小山真紀（工学部）	2 (0)	51 (12)
11月20日	イスラム文化とのふれあい@モスク	アブドゥルカダール・オバリ（岐阜モスク） シティ・エズリン・ビンティ・イスマイル（工学部2年生）	17 (3)	
11月27日	溜め込まない身体を目指そう！	熊谷佳代（教育学部）	中止	
12月4日	明日、日本代表になれる...かも！	高口僚太郎（障害学生支援室）、ピア・サポート・サークル	12 (0)	
12月11日	上宮珈琲3号店	上宮成之（工学部）	12 (7)	
12月18日	学生→社会人 将来を想像してみよう	奥村真衣（人材開発部職員育成課職員育成係） 佐藤孝英（総合企画部総務課広報係） 小池有紀（工学部事務部管理係）	8 (2)	

注）参加人数の（ ）内は教職員の参加者数

実施期間は、前期が2019年5、6月で、後期は2019年11、12月であった。例年、後期は10月も開催していたが、本年度は企画者が10月末に別のシンポジウムを企画しており、そちらの準備のため、いこまいセミナーの準備に十分な時間を避けないと判断し、実施を見

送った。前後期ともに、実施時間は例年通り、水曜の午後に行った。セミナー開始前の各自持ち寄りのランチ会「いこまいランチ」は今年度は開催しなかった。

対象は、昨年度後期に引き続き、全学生および全教職員とした。定員は、参加者一人一人の体験、発言、交流機会を十分に確保できる10名としたが、主担当者が可能と判断すれば、10名を超える申し込みがあっても受け入れた。その結果、今年度はすべての申込者を受け入れることができ、10名を超えたプログラムは11回中8回であった。参加者は、前期延べ73名（うち教職員延べ7名）、後期延べ51名（うち教職員延べ12名）、合計延べ124名（うち教職員延べ19名）であった。

参加受付は、例年通り、申込先アドレスに、参加希望プログラム、日時、学籍番号、氏名、所属学部、電話番号を記入して送信してもらった。教職員の参加申込も同様に行った（学籍番号は記入なし）。参加者からのメールには、受信確認と受付完了のメールを返信した。当日参加および途中入退室も認めた。

広報活動は、学生に対しては、各学部の初年次セミナー、保健体育特別講義、就職活動支援ガイダンスの時間を利用して、実施担当者が自ら説明、案内した他、各種学内掲示板に案内チラシを掲示した。チラシは半期ごとの概要版と各回の詳細版を作成した。前期の概要版を図1に、各回の詳細版の一例を図2に示す。学生の大学メールアドレスへの案内は、例年と同様に、毎週月曜日に、その週に開催されるプログラムと、それ以降のプログラム2、3回分の案内を行った。教職員への広報は、岐阜大学のグループウェアシステムである「G-group」上の通知機能を使用して周知し、岐阜大学独自の研修カードである「miruca」を使用可能とした。保健管理センターホームページ内のトップページには実施予定のプログラムの案内を掲載し、「いこまいセミナー」のページには、過去に開催されたプログラム一覧を掲載した。今年度は新たに、「いこまいのぼり旗」を3本作成した。いこまいセミナー開催期間中に保健管理センターに掲出するとともに、プログラム開催日には実施場所に掲出することで、多くの人の目に留まり、開催が認知されるようにした。

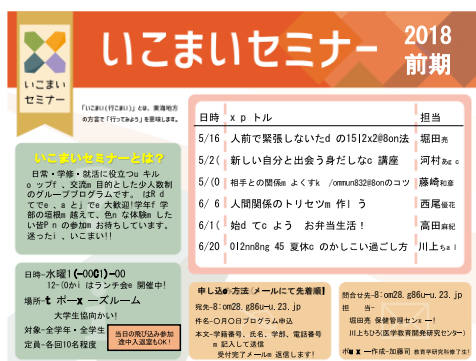


図1 前期概要チラシ

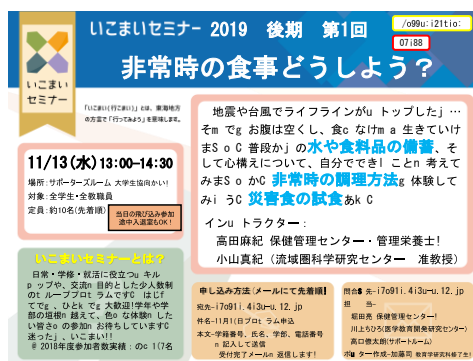


図2 各回詳細版の一例

会場は、内容に応じて大学構内の各施設で開催した。加えて11月20日は大学近隣にある岐阜モスクを利用した。

参加者に対しては、プログラム終了後にアンケート調査を行った。内容は、参加プログラムの期待度、満足度、参加度を 0 から 10 の 11 件法で回答を求めた他、参加した理由、プログラムに参加して得られた新しい発見や気づき、今後活かしていきたいこと、プログラムの残念に思った点、今後、開催してほしい企画、意見・質問・感想等を自由記述で回答を求めた。加えて今年度は、岐阜大学が掲げる「進める力」、「伝える力」、「考える力」から構成される「基盤的能力」が、いこまいセミナーを通じてどの程度獲得されたかを 0 から 3 の 4 件法でそれぞれ自己評価で回答を求めた。

今年度、実施に際して特に意識した点として、参加者間のコミュニケーションがより活発になるような工夫を随所に施したことが挙げられる。これは、2018 年に岐阜大学の学生を対象に行なった半構造化面接調査⁵⁾ および大規模アンケート調査⁶⁾ で、学生は「効果的なコミュニケーション」や「対人関係スキル」の獲得を強く求めていることが示されたためである。これまでいこまいセミナーでは、座学形式ではなく体験形式をベースとしていたが、本年度はその傾向を更に強めた。また、これらの調査結果は、プログラム評価研究でいうニューズアセスメント⁷⁾ に該当し、プログラム内容の策定の際にも参考にした。

3. いこまいセミナー2019 前期プログラム

ペアヨガ : Relax & Communication (5月15日)

保健管理センター非常勤講師の石垣倫子がファシリテーターを務めた。ヨーガプログラムは、これまでのいこまいセミナーでも開催実績があったが、今回はリラククスに加えて、コミュニケーションも主たる目的に開催した。具体的には 2 人でペアになり、背中を合わせて相手の背中中の温かさを感じ、そこから手を一緒に上げる動作を行った。背中を合わせて横から手を上げるのは肩をしっかり動かす動作になるので、はじめは手の動かしかくさを感じるものの、背中が触れ合うことや手を取り合うことを通して、身体が最初よりも段々とより動くようになり、手の上がりがスムーズになることに気づくことをめざした。自身と相手の身体感覚を確認することで、リラククスし自然に身体が動くことを体験すると同時に、コミュニケーションをとることの重要性を知ることにもなった。これは人間の持つ自然な力に気づくことでもある。心も身体も余裕が生まれ、自身を大切に感じる感覚をもてたと思われる。ヨーガとは、サンスクリット語で「繋がる」ことを意味しており、ヨーガをすることで自身と繋がり、段々と周りとの繋がることの大切さが実感されたと思われる。

相手を惹きつける スライドの作り方 (5月22日)

自然科学技術研究科環境社会基盤工学専攻 2 年生の堀口拓治がファシリテーターを務めた。本プログラムは、アカデミック・コアの企画として以前に開催されたが参加者が少ない結果に終わっていた。本来は非常にニーズの高い内容であると考え、アカデミック・コアの職員と協議し、いこまいセミナーの広報手段を活用し、いこまいセミナーとアカデミ

ック・コアの共同企画として、アカデミック・コアで開催することとした。その結果、学生11名、職員1名の参加があった。プレゼンテーションに関する書籍を参考に、見にくいスライド、見やすいスライドの例を提示し、聞き手を惹きつけられるような工夫として、文字の大きさや図表の見せ方のテクニックを紹介した。大学生活において、授業での発表や卒業研究など、プレゼンテーションを行う機会は避けて通れないものである。しかしながら、その方法論やテクニックを学ぶ機会は非常に限られている。したがって、このような取り組みは非常に貴重であると考えられる。

「疑う」スキルを身につけよう（5月29日）

障害学生支援室の高口僚太郎がファシリテーターを務めた。参加者は、学生13名、職員1名であった。タイトルにある「疑う」対象は、自分自身の中にある他者への先入観やイメージ、あるいは、「当たり前」とされている現象に向けられている。本プログラムでは、そうした先入観や「当たり前」を一度疑い、他者とのコミュニケーションにおいてそれらを前提としないことで、どのようなコミュニケーションがとれるのかということに主眼を置いた。具体的には、参加者に2人1組になってもらい、ペアになった相手のことを聞き取ってもらった。その際、先入観や「当たり前」を前提とせず、相手と向き合い、丁寧な聞き取りを心がけるよう促した。聞き取った内容は、他己紹介のかたちで発表してもらった。参加者は限られた時間であったが、初めて出会った相手ともさまざまな会話を交わっていた。なかには、友人同士で参加した学生もいたが、「友だちだから」という前提を持たず聞き取りを実施したことで、新たな一面を発見できたと感想を述べていた。また、医学部や教育学部に在籍する学生も参加していたが、共通して、ペアになった相手から「医者になるため」「教師になるため」という動機が学部選択の背景にあると思われていた。しかし、それら学部イメージに紐づく「当たり前」を前提としない聞き取りを実施したことで、例えば、「教師にはあまり興味はないが教員免許があれば何かと役立つから」といったことも引き出している学生もいた。

ハラルフードを知って食べてみよう（6月5日）

マレーシアからの留学生で工学部2年生のシティ・エズリン・ビンティ・イスマイルと、保健管理センター管理栄養士の高田麻紀がファシリテーターを務めた。本プログラムは、前年度の「感謝の集い」で、実施協力者より「これまで実施してきたプログラム同士で協働できないか」との提案があり、調理と多文化交流のコラボレーション企画として実現した。参加者は学生11名であった。最初に、ハラルフードに関する基礎知識をクイズ形式で紹介した。日本でよく使用される調味料等もいくつか実物を用意し、ハラルフードに適合するのか、しない場合はどのような食材で代用できるのかを、適切な栄養摂取の情報も取り入れながら解説した。実習はマレーシアの伝統的なお菓子であるオンデ・オンデを調理した。例年の調理企画のように作成手順を提示するのではなく、参加者を2グループに分け、食材と調

理器具のみ提示し、相談しながら調理できるように構造化した。そうしたことで参加者間のコミュニケーションが活発になった。概ね完成に近づいたところで、エズリン氏が正しい作り方を実演し、試食した。あわせて、開催日がちょうどイスラム教徒の断食月「ラマダン」が明けた日だったため、その日に食べるというマレーシアの伝統的な料理も試食した。本プログラムを通して、ハラルフードの厳格さに触れるだけでなく、日常の食生活における工夫や、日本の食文化との異同について参加者は深く学ぶことができたと思われる。

「計画の立て方」を計画的に学んでみる（6月12日）

川上ちひろ、奥村真衣がファシリテーターを務めた。大学生にとって計画を立てる機会は多いが、わざわざ習うものではない。例えば学業では単位認定が受けられるように計画的にレポートや試験の準備を進めることを始め、実験、卒業論文や修士論文、学会発表等の準備がある。プライベートでは、アルバイトや部活動、休日の過ごし方など多岐にわたり、しかも自律的に行わなければいけないことが増える。手際よく計画できる学生はいいが、うまくコントロールできないと何もできずに終わってしまう、ということにもなりかねない。

今回は“旅行の計画を立てる”ということ为例に、計画の立て方を具体的に考えてみた。初めに普段はどのように計画を立てているのかを可視化してもらい参加者と共有したところ、それぞれ違った方法で決めていることが分かった。例えば、どこに行きたいか行先を決める、行ける日程の中で決める、何がしたい(食べたい)ということから決めることが多く、次に目的地に到着する手段(たとえば新幹線に乗りたい)や、旅行の予算、持っていく荷物などを考えるということが多いようであった。

計画を立てる際、その事柄を遂行するために一番重要な目的は何かを見定め、どのように行えば合理的に進めることができるのか検討することが大切である。しなければいけないことが多い大学生にとって、物事を計画的に行うことは将来の目標を達成するために必要なスキルである。個々に方法は違っても、計画的に進められるよう意識して大学生活を送ってほしい。

岐阜の夏の準備を始めよう：熱中症・虫・ケガ（6月19日）

保健管理センターの保健師・看護師の後藤真紀、中村紗矢香がファシリテーターを務めた。本プログラムは、昨年度本学においてサークル活動時等に熱中症やケガによる搬送事例が多発したことを受け、予防と適切な初期対応に関する正しい知識を身につけ、自己健康管理能力を高めることを目的に開催した。本プログラムのみ、通常の広報活動に加えて、全サークルに対して文書にて概要の案内と参加依頼を行った。参加者は学生14名、教職員6名であった。サークル代表として参加した学生は13名で、教職員はイベントの運営に携わる職員や、大学保育園の職員等であった。プログラムは三部構成で行った。「熱中症」パートでは、熱中症の種類、予防方法、現場での適切な応急処置の方法を解説し、実際に本学で起きた事例も紹介した。「虫刺され」パートでは、岐阜地域で夏に多く発生する虫の発生場所や

時間帯、刺されたときの症状を、これも実際に起きた事例を交えて紹介した。そして、刺された際の対処法を解説した。「ケガ」パートでは、切創や挫創等の機械的損傷に着目し、その処置について解説した。コミュニケーションが進むよう、参加者同士で話し合いの時間も設けながら行った。3パートとも正しい処置が行われないと命に危険を及ぼすことにもなりかねない。参加者は自身の健康管理能力を高めるだけでなく、本プログラムで得た学びを所属サークル等に還元するよう促した。最後に、塩飴など熱中症対策食品と大学周辺の医療機関マップを参加者に渡した。

4. いこまいセミナー2019 後期プログラム

非常時の食事どうしよう？ (11月13日)

高田麻紀がファシリテーターを務めた。参加者は学生2名に留まった。地震や台風等によってライフラインがストップした場合を想定し、水や食料の備蓄（ローリングストック法）を紹介した他、ポリ袋クッキング（パッククッキング）を実際に体験し、ご飯を炊き、ツナカレーを調理した。合わせて、ポテトスナックを用いたサラダも調理した。災害支援の専門家である工学部准教授の小山真紀もファシリテーターを務め、実際の避難所での食事情について紹介があった。参加者は災害時を想定しながら、協力しあって調理を行った。本プログラムを通して平日頃からの食料の備蓄の重要性や災害時の調理方法等の啓発を行うことが出来た。

イスラム文化とのふれあい@モスク (11月20日)

大学近郊にある岐阜モスク（バーブ・アル＝イスラーム）で開催した。岐阜モスク管理人のアブドゥルカダール・オバリがファシリテーターを務め、工学部2年生のシティ・エズリン・ビンティ・イスマイルをはじめ、複数の留学生在サポート役として実施に協力した。参加者は学生14名、教職員3名であった。本プログラムは、宗教勧誘が目的ではないこと、異文化理解と交流が目的であることを参加者全員と確認した後に開始した。最初に礼拝の様子を観察した後、礼拝の手順やルールに関するレクチャーを受けた。その後、モスクの各部屋を見学した。参加者からの質問も非常に多く出て、多文化理解、多文化共生に寄与することができた。大学生活で留学生と接する時に、文化や宗教上のルールやマナーを知っていないと対応に困る場合がある。本プログラムを通じて、正しい知識を身に着けたことで、より積極的に留学生との交流が図れるようになることが期待される。

明日、日本代表になれる…かも！ (12月4日)

モルックとはフィンランド発祥のレクリエーション競技である。12本の木製のピン（スキットル）をボーリングのピンのように並べ、3～4メートル離れた位置から木の棒（モルック）を投げ、倒したスキットルの数字と本数を基に得点を計算し（1本だけ倒れれば、倒

したスキットルの数字が得点となり、複数本倒れれば、倒した本数が得点となる)、その合計が 50 点ちょうどに到達することを目指す競技である。競技人口が少ないことから、誰でも、今からでも日本代表選手になれる可能性があるため、このようなタイトルで開催した。本プログラムは、モルック経験者である障害学生支援室の高口僚太郎と岐阜大学ピア・サポート・サークル (PSC) とがファシリテーターを務めた。参加者は学生 12 名であった。1 回戦は参加者をランダムに 3 グループに分けて対戦し、2 回戦は、1 回戦の順位を基に上位、中位、下位グループに分けて対戦した。個人競技として行ったが、互いに戦略を相談し合ったり、得点の計算を助け合ったり、自発的なコミュニケーションが多く生まれた。PSC に所属する一部の学生を除いては全員がモルック初体験であったため、実力も拮抗しており、非常に和やかな雰囲気で行われた。

上宮珈琲 3 号店 (12 月 11 日)

過去 2 年、参加者から好評を博した本プログラムは今年度で 3 回目の開催となり、工学部教授の上宮成之がファシリテーターを務めた。参加者は学生 5 名、教職員 7 名であった。今回も生協第 2 食堂で開催した。コーヒーの美味しさを決める要素の説明やコーヒーの様々な淹れ方の紹介を行った後に、実際に色々な種類のコーヒーをペーパードリップで淹れて試飲した。開催予定時間の 1 時間半を超えて残る参加者も多く、コーヒーを片手に談笑した。今年度の成果としては、いこまいセミナー外で有志によるエクステンションが開催されたことが挙げられる。これは、プログラムに参加した教職員からの発案で、希望者が講義や業務の調整がつく時間に集まって、コーヒーを飲みながら知識や技術の習得を目指したり、交流を深めるものである。およそ月 1 回のペースで開催されており、参加者同士の呼びかけにより、上宮珈琲 3 号店に参加していなかった学生や教職員にも繋がりや輪は拡張している。

学生→社会人 将来を想像してみよう (12 月 18 日)

人材開発部の事務職員で、教職員の研修業務を担当している奥村真衣がファシリテーターを務めた。大学が学生に提供しているサービスや情報として、就活関連行事や相談窓口はあるものの、実際の彼らの未来は就職関連だけでは成り立たない。就活や就職先に限らず、どこで生活し、どんな仕事をして、どんな風に毎日や週末を過ごし、そして誰と生きていくのか、という「より現実的な未来」をイメージしてもらうきっかけになればという思いで本プログラムを企画した。当日は企画者が進行を務め、話し手 2 名 (岐阜大学卒業の岐阜大学職員から、経験等を勘案し選出) に学生時代の様子や進路を考え始めた時期、就職活動の取り組み、就職してみて実際に感じたこと、転職、結婚や育児などの私生活、余暇の過ごし方などの話題ごとに答えてもらった。

企画の趣旨から対象は学生に限定し、参加者は学生 6 名 (オブザーバーとして職員 2 名が参加) であった。回の後半では、参加学生から話し手への質問や相談を受け付け、より具

体的かつ学生のニーズに合った経験談を共有することができた。ほかの学生の質問を更に展開して質問する学生や予定時間を過ぎても熱心に質問する学生がおり、参加学生の積極性は非常に高かった。

「より現実的な未来」の一例として2名の職員が経験を語ることが、参加学生の思考や今後何らかの影響を与えられればと企画したが、大学職員でありながら普段は学生との関わりが少ない企画者・語り手にとっても、「現在の学生」の様子を知ることができた貴重な機会となった。

5. 参加学生の特徴とアンケート結果

実数では90名の学生（学部生80名、院生10名）、18名の教職員（教員4名、職員14名）、計108名が参加した。開催回数が減ったにも拘らず、前年度に比較して、参加者数は増加した。性別に関して、学生は今年度も女子学生（49名）の方が男子学生（41名）よりも参加人数が多かった。在籍学生数に対する割合は、女子学生（1.8%）、男子学生（0.9%）であった。教職員は女性（14名）の方が男性（4名）よりも参加人数が多かった。

参加回数は、学生は1回が82名、2回が5名、3回が1名、4回が1名、6回が1名であった。教職員は1回が17名、2回が1名であった。

参加学生の所属学部は、人数は工学部（29名）、教育学部・教育学研究科（17名）、応用生物科学部（17名）、地域科学部（10名）、自然科学技術研究科（6名）、医学部（4名）、その他・未記入（4名）の順に多かった。在籍学生数に対する割合では、今年度は教育学部（1.7%）が最も高かった。留学生の参加は15名で、昨年度より倍増した。

0から10の11件法で測定したプログラムに対する期待、満足、参加度は、前期の平均はそれぞれ10点満点中7.5、8.4、7.7点、後期は同様に8.1、9.3、8.0点とすべて高い値を示していた。期待度は、「上宮珈琲3号店」、「イスラム文化とのふれあい@モスク」（ともに8.9点）、「ペアヨガ：Relax & Communication」（8.1点）が特に高かった。満足度は、「上宮珈琲3号店」（9.8点）、「イスラム文化とのふれあい@モスク」（9.7点）、「ハラルフードを知って食べてみよう」（9.6点）が特に高かった。参加度は、「明日、日本代表になれる…かも！」（8.5点）、「ペアヨガ：Relax & Communication」（8.3点）、「ハラルフードを知って食べてみよう」、「イスラム文化とのふれあい@モスク」（ともに8.1点）が特に高かった。今年度も、すべてのプログラムにおいて期待度の得点を満足度の得点が上回っていたことから、参加者に対しては参加前の期待以上のプログラムを提供できたと言える。

「参加理由」（複数回答あり）に関しては、「プログラム内容への興味関心」（74件）が最も多く、次いで“友人に誘われて”（20件），“教職員に誘われて”（13件），“他の人と交流したかったから”（8件）と続いていた。前年度に比べて、教職員に誘われて参加する学生が増加していた。

今回新たに回答を求めた、プログラム参加を通して「基盤的能力」がどの程度獲得された

かについて、前期の平均（0 から 3 点）は「進める力」が 1.2 点、「伝える力」が 1.8 点、「考える力」が 1.6 点であった。後期の平均は順に 1.3, 1.5, 1.5 点であった。各回の平均点を表 2 に示した。「進める力」は、「計画の立て方」を計画的に学んでみる（2.3 点）、「岐阜の夏の準備を始めよう：熱中症・虫・ケガ」, 「明日、日本代表になれる…かも！」（ともに 1.8 点）が特に高かった。「伝える力」は、「疑う」スキルを身につけよう（2.2 点）, 「計画の立て方」を計画的に学んでみる（2.0 点）, 「明日、日本代表になれる…かも！」（1.9 点）が特に高かった。「考える力」は、「ハラルフードを知って食べてみよう」（1.9 点）, 「岐阜の夏の準備を始めよう：熱中症・虫・ケガ」, 「明日、日本代表になれる…かも！」（ともに 1.8 点）が特に高かった。いずれの基盤的能力も、上位の多くは前期に開催したプログラムであった。前期は日常・学修・就職活動に役立つ知識やスキルの獲得を特に重視していたため、想定通りの結果が得られた。

表 2 プログラムごとの基盤的能力獲得の平均点

プログラム名		進める力 (点)	伝える力 (点)	考える力 (点)
前期	第1回 ペアヨガ：Relax & Communication	0.9	1.5	1.3
	第2回 相手を惹きつける スライドの作り方	0.5	1.6	1.5
	第3回 「疑う」スキルを身につけよう	1.2	2.2	1.6
	第4回 ハラルフードを知って食べてみよう	0.9	1.6	1.9
	第5回 「計画の立て方」を計画的に学んでみる	2.3	2.0	1.7
	第6回 夏の準備を始めよう：熱中症・虫・ケガ	1.8	1.8	1.8
後期	第1回 非常時の食事どうしよう？	0.0	0.0	0.0
	第2回 イスラム文化とのふれあい@モスク	1.1	1.4	1.4
	第3回 明日、日本代表になれる…かも！	1.8	1.9	1.8
	第4回 上宮珈琲3号店	1.6	1.6	1.6
	第5回 学生→社会人 将来を想像してみよう	0.8	1.2	1.2

6. 開催の成果・今後の展望

学生に限らず、教職員の参加も認めるようになって2年目を迎えたいこまいセミナーは、2019年度も多くの学生、教職員の協力を得ながら、魅力的なプログラムを数多く展開することができた。特に今年度は、基盤的能力の獲得について評価したことにより、いこまいセミナーは、本学の教育目標の達成にも寄与するプログラムであることを示せた。

これまで、プログラム実施者となったのは主に教員または学生支援系職員であったが、2019年度は学生が主担当者となって企画したプログラムは前年度の2回から4回に増え、事務職員が主担当となって企画したプログラムも1回開催することができた。これは実に全体の約半分にあたる。このことから、いこまいセミナーは参加者の多様性に加え、実施者も多様なプログラムへと発展を遂げていると言える。加えて、2020年度の東海国立大学機

構の設立に先立ち、岐阜大学と名古屋大学の学生支援部署の連携、協働事業のひとつとして、「名大版いこまいセミナー」が2019年10月より始まっている。「名大版」は、学生の健康的な成長（人間力向上）を目的とする心理教育プログラムとして位置づけられており、学生支援センターの兼任相談員（教員）が、研究や趣味の話を交えたプログラムを月1回のペースで開催している。企画、運営に際しては、これまで岐阜大学で行われてきたいこまいセミナーのノウハウが提供されており、大学外への波及効果ももたらされている。いこまいセミナーは、大学の規模や文化によって異なる発展を遂げることも予測されるため、今後、両大学でどのように展開していくか注目したい。

また、2018年度の課題と展望⁴⁾で取り上げた「プログラムの妥当性およびその価値判断」であるが、2019年度は、岐阜大学の学生を対象に質問紙と半構造化面接によるニーズアセスメント^{5,6)}を行い、学生が求めているスキルや知識（プログラム）を把握し、それに見合った企画を実施することで、プログラムの妥当性を確保した。具体的には、学生はコミュニケーション能力向上に対するニーズが高いことが窺われた。そこで、2019年度は参加者間のコミュニケーションがより活発になるよう、実施者が積極的に参加者に発言を求める、グループワークを多く取り入れる等の工夫を施した。これはプログラムの価値判断の項目として取り入れた基盤的能力の獲得の程度においても、「伝える力」が高い得点を示しており、その成果が裏付けられたと言える。一方で、プランニング力向上のニーズも高いことが窺われたが、それを基に企画した「計画の立て方を計画的に学んでみる」は参加者が3名と少なかった。これは、他イベントのバッティングなど様々な要因が影響しあっていると考えられるが、ニーズアセスメントで高く位置づけられたものが、必ずしも多くの参加者を得られるとは限らないということは今後も考慮しつつ、プログラムを立案する必要がある。

最後に今後の展望として、いこまいセミナーのWeb配信の可能性についてまとめる。いこまいセミナーは座学ではなく、参加型のプログラムであるため、当日その場にいることが理想であることに変わりはない。一方で、録画または生中継でのWeb配信を画策しているのには2つの理由がある。1つ目は、いこまいセミナーの様子をより詳細に伝え、様々な参加形態を受け入れるためである。これまで参加者からは、「(参加前は)どんな雰囲気なのか心配だった」という声がよく聞かれており、文章や写真だけではなく、映像資料も用いることで状況が明確になることが期待できる。同時に、別の予定があり当日に参加できない学生にとっては、Web配信を行うことで間接的ではあるがプログラムの事後参加機会を創出できる。2つ目は、名古屋大学との統合による連携、協働事業の一環として、名古屋大学の学生にも岐阜大学のいこまいセミナーへの参加を実現させるためである。両大学は直線距離で約40kmあり、公共交通機関では約1時間半かかる。そのため、いこまいセミナーのためだけに名古屋大学の学生が岐阜大学まで来ることは現実的ではない。しかし、Web配信を行えば、名古屋大学または自宅にいながら岐阜大学のいこまいセミナーに参加することができるようになる。Web環境の整備といった課題もあるが、いこまいセミナーをより多くの学生、教職員に提供し、スキルアップや支援の一助となることを目指したい。

7. 付記

いこまいセミナーの運営にあたっては、保健管理センター、障害学生支援室、医学教育開発研究センター、就職支援室の教職員に協力いただいた。実施にあたっては、保健管理センターの後藤真紀氏、中村紗矢香氏、宮本由紀子氏、石垣倫子氏、高田麻紀氏、工学部の小山真紀先生、上宮成之先生、事務職員の池田有紀氏、佐藤孝英氏、自然科学技術研究科 2 年生の堀口拓治氏、工学部 2 年生のシティ・エズリン・ビンティ・イスマイル氏、岐阜大学 PSC のみなさんに協力いただいた。ここに記して感謝申し上げます。

【参考文献】

- 1) 堀田亮, 西尾彰泰, 舩越高樹, 石垣倫子, 岩田英孝, 加藤典子, 服部三和子, 山本眞由美(2016). スキルアップグループセミナーの実践-保健管理センター・障害学生支援室・就職支援室が共催した学生支援の取り組み-, 岐阜大学教育推進・学生支援機構年報, 2, 156-167.
- 2) 堀田亮, 舩越高樹, 川上ちひろ(2017). いこまいセミナーを通した学生支援の取り組み-多部局協働授業外グループプログラムの実践-, 岐阜大学教育推進・学生支援機構年報, 3, 268-279.
- 3) 堀田亮, 舩越高樹, 川上ちひろ(2018). いこまいセミナーを通した学生支援の取り組み 2-教員・職員・学生が協働したグループプログラムの実践-, 岐阜大学教育推進・学生支援機構年報, 4, 200-211.
- 4) 堀田亮, 川上ちひろ(2019). いこまいセミナーを通した学生支援の取り組み 3-全構成員が参加可能なグループプログラムへの発展-, 岐阜大学教育推進・学生支援機構年報, 5, 178-189.
- 5) 堀田亮, 西尾彰泰, 川上ちひろ, 佐々木恵理, 高口僚太郎, 栗木由美子, 今村七菜子, 加納亜紀, 山本眞由美(2020). 半構造化面接調査による大学生が求めるライフスキルや知識の探索的検討, CAMPUS HEALTH, 57, 128-133.
- 6) 堀田亮, 西尾彰泰, 川上ちひろ, 佐々木恵理, 高口僚太郎, 栗木由美子, 今村七菜子, 加納亜紀, 山本眞由美(2020). 大学生はどんなライフスキルを獲得したいのか-岐阜大学での質問紙調査から-, CAMPUS HEALTH, 57, 122-127.
- 7) 安田節之(2011). プログラム評価: 対人・コミュニティ援助の質を高めるために. 新曜社.

(著者連絡先) 堀田亮 岐阜大学保健管理センター 〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1

TEL: 058-293-2166 FAX: 058-293-2177 E-mail: horita@gifu-u.ac.jp